

中国人の日本語作文コンクール

日本僑報社など主催
／アジア調査会後援

一等賞3作品

中国に在住する中国人青少年を対象とした「第10回中国人の日本語作文コンクール」(日本僑報社・日中交流研究所主催/アジア調査会後援)について、アジア時報6月号に続き一等賞3作品を掲載します。テーマは「ACG(アニメ・コミック・ゲーム)と私」「公共マナーと中国人」の二つです。中国全土で学ぶ大学生らが応募した4133作品の中から選ばれたのは最優秀賞1作品、一等賞5作品、二等賞15作品、三等賞40作品で、今回は最優秀賞と一等賞2作品を掲載しました。これらの受賞作品は「御宅」とよばれても——中国若者たちの生の声」のタイトルで日本僑報社から出版されています。なお、5月31日に締め切られた第11回コンクールには過去最多の4737本の作品が寄せられたとのこと。

(編集部)

心が帰るべき場所
嶺南師範学院外国語学院
姚紫丹

風が頬に当たり、とても気持が良い。その風が行く手を遮る樹々を押し退けてくれて、草の匂い、日差しのかげがき、鳥の声。毎朝の学校の景色だが、あたかも西流魂三区修道場の道のような。これは初めて志波海燕殿に出会った風景だった。その日に私は、アニメなどを見ながら海燕殿のことを思い出した。あの時、「BLEACH」の中で、わずかな数秒間、わずかな言葉、私はその男を覚えた。今までの私にはチョット理解のできない、アニメの空想の世界だった。「心は体の中には無ねえ。何かを考える時、誰かを思う時、そこに心が生まれるんだ。」って、これは海燕殿の言葉だった。その言葉を口にした時の周りの景色、

何もかも心に焼き付いた。白雲、青い空、木立一本一本。わたしの心はどこにあるのだろうか。わたしはいつも考える。

父と母や、友人の心の中にわたしの心を預けていてわたしの心が生き続けているのだろうか。

わたしは生まれつきの心臓病の持ち主で、一昨年、脳膜炎に襲われ、半年間を病床で送っていた。今は、字も書けない、歩くことも難しい。心配事が山ほどあって、いい成績を取ろうと思っても取れない。口惜しい、しかし何もできない。そういうとき友達がわたしのことに気を使ってくれて、心の思いを何でも話してくれる。しかし、こういった友達ほとんど小学校、中学校の頃の同級生だ。電話はつねにかけてくれるが、離れ離れになっているので、そばには誰もいない。一般的に、人間は成長しながらどんどん友達に去られていくと言われるが、私の友達は、私から離れることなく、ずっと私の力になってくれている。

また、父と母も、わたしのもう一つの力だ。父も母もどんな時も笑顔を見せてくれる。わたしが自分のことが嫌になっても、彼らはわたしのことを一度も諦めなかった。高額の治療費に対しても、手術室の扉の前は何度待たせても、絶望という感情を持っていいと思うが、一度も諦めてくれなかった。一度、お医者さんに「もう難しいかもしれない」と告知され、母は死ぬほど悲しかった。

た。しかし、それにしても母は諦めはしなかった。わたしが健康になるのを信じてずっと支えてくれて、待っていてくれた。母の思いが伝わったせいとか、お医者さんに告知された教時間後、出血が止まった。心臓の機能も正常に戻った。目が覚めたのはその日の深夜だった。わたしは確かに感じられていた、わたしが生きていたことを。退院して学校に戻っても父と母が相変わらず電話をかけてくれて、励ましてくれていた。何々という漢言葉が効くとか、よく体を鍛えて体を強くしてとか、平凡な言葉に過ぎないが、わたしにとってはこの上もない素敵な言葉だ。それを聞くたびに、父と母の白髪を思い出して、悲しくてならない。そういう時に、海燕殿の言葉が浮かんでくるのだ。「絶対しちゃいけないことがある、それは、一人で死ぬことだ」という言葉だ。

私は死なない。まして一人で死ぬなんて。

わたしは母に「わたしは悪いこと何もしていないのに、なんで私だけこんなひどい目に遭うの?」と聞いたことがある。母はすぐに答えてくれなかった。父は「バカなこと言うな」と言った。今になって少し理解できた。すべての出来事に理由と意味がある。病気のおかげでわたしは両親の苦勞がわかった。友人のこともたくさんわかった。やっとなんか届かなくなった、わたしの心の存在する場所を。手は天に届かない。神の顔が見えない。神様はいつたい

どのような存在だろうか。わたしにはわからない。しかし、わたしにとって、父と母と友達はわたしの神様だ。そう、そうだと信じている。わたしは将来卒業して偉くなってお金を稼いで両親に大きな家を買ってあげて、友達に恩返ししたいなんて言わない。自分を大切にすることは、お世話になった人たちへの最大の敬意ではないだろうか。その人たちのいるところは、わたしの心の帰るべき場所なのだ。

(指導教官・李国寧)



祖父、母、私

西安交通大学外国语学院 向穎

今年も桜満開の頃を迎えた。

ある日、村中先生からこんな話を聞いた。花見にやってくる大勢の市民で大学のキャンパスが賑わっているその時の出来事だった。ある父親が自分の子供を桜の木の上に登らせているのを見て、先生は「降りなさい」と注意した。

そうしたら、その男性は「おばさんが怒っているから、

降りようね」と子供に言ったという。先生はそれを聞いて、呆れて「おばさんが怒っているからではなく、木に登るのはいけないからでしょう」と自分に言い聞かせたそうだ。

その話を聞いて、祖父を思い起こした。

幼いころ、祖父も私を桃の木に登らせたことがあった。母が枝の上に座っている私を見てすぐ「早く下ろして」と祖父に言ったところ、祖父は「大丈夫だよ、このくらい別にいいじゃないか」と答えた。

そのほかに祖父がどこにでもごみを捨てたり、いつもけんかのように大声で喋ったりするのも、よく見かけた。だんだん大きくなってきた私は祖父には公共マナーという概念がないと感じた。どうしてかという質問を母にしたことがある。母は「私ならそのわけがわかるわよ」。

祖父は1944年に生まれたので、新中国成立よりも5年早いわけだ。祖父が育った貧しい田舎には学校がなかった。祖父の両親は饑饉どころか子供らを食べさせるだけでも精一杯だった。そんな祖父はなんとか就職できたものの、飢えに苦しむ生活が続いた。

「衣食足りて礼節を知る」がよく言うでしょ、そんなに貧しい環境で育ったのならマナーを気にする余裕なんかないはずなのに。お母さんは礼儀正しいから、きっと豊かに育ってきたでしょうね」と私は母に聞いた。

祖父の24歳の頃、長女が生まれた。それが私の母だ。文

化大革命が始まったばかりのころで、物資が非常に欠乏していたので、やはり満足に食べられなかった。幼い母は、

りんごは病気になるかかったとき、鮎はお正月のときにしか食べられなかったという。

「えっ、それならお母さんとお爺さんが違うのは物が豊かかどうかとは関係ないじゃないの?」「うん、家では特別饗をされなかったけど、少なくとも学校には行ったことがあるわ」。母はしばらく黙って「実は、私が気をつけているのはあなたのためもあるのよ」と言った。

私は90年代に生まれた。その時代の子供たちと同じく、幼稚園でさまざまなルールを教えられた。手を上げると発言ができ、並んでご飯を受け取り、みんなと一緒に昼寝をするときには声を出してはいけないなど、基本的な規律を学んだ。学校のほか、母からもずっと厳しい饗を受けた。

私が生活していた小さな町の横断歩道には一部分しか交通信号がなかった。そのため人々には交通信号に従う習慣がなく、時として赤信号で飛び出していく。しかし、母は違った。車が通っても通らなくても、必ず私を連れて一緒に信号が青になるのを待っていた。

「正直言うとな、たまに一人のときは、信号無視することもあるのよ。ただ、あなたを連れているときはどうしてもしんな行為はだめだと思って」、「どうして?」、「家庭教育なしに育ってきたからこそ、自分で手本を示して子供を

教えることにしたの」

確かに、私たちの後退した姿が両親で、前進した姿が子供だ。そして、子供を通して未来に到達することができるのだ。公共マナーを身につけるには学校教育が必要だけでなく、義務教育が普及した今日、家庭教育がより大切な要素だろう。今両親の欠点を受け継いでいる人があることは否定できないが、母のように両親の欠点を反省し、子供にマナーを身につけさせた人もいる。

だから、もっと先生に怒ってほしい。そして、あの男の子がたとえ公共マナーを身につけていない父親を持っているとしても、将来きつと自らの行動で自分の子供に公共マナーを教える父親になることを信じてほしい。中国人もできる限り自分の悪い習慣を直して、子供への教育を通して秩序整然とした未来に到着できることを信じてほしい。

(指導教官・張文麗)



私とACGの縁

山東财经大学

陳謙

最近暇があったので、子供時代の日記を読んでいたら、

面白いページを発見した。

「今日宿題をしているとき、母の目を盗んで『クレヨンしんちゃん』を読んでいたら、母が急に、ドンッとドアを開けて入ってきた。私は慌てて本を隠したが、もう遅かった。母は、『また漫画を読んでいたの?! ほら! 出しなさい!』と言って、私の宝物を全部押取していった。私はほんやり座っていた。しばらくして、仕方なく、宿題をすることにした。

でも、全然勉強する気にならなかったから、隠してあった別の漫画を読み始めた。漫画は部屋のあちこちにあつて、座布団の下にも2冊隠してあったのだ。

宿題を書き終えて、部屋を出ると、母が私の漫画に夢中になっていて、読みながら笑っているのだった。そして、僕に向かって、しんちゃんってかわいいね、と言った。まったくもう……」

母をも夢中にさせた日本の漫画は、小さい頃から常に私の傍らにあった。それは今でも変わらない。私にとつて、日本の漫画やアニメ、ゲームは最良の先生でもあり、友達でもある。

最初に読んだ漫画は「ドラゴンボール」だった。一冊は3.5円で、当時まだ小学生だった私にとつては、とても高価なものだった。それでも、最新の「ドラゴンボール」を買うために、私は小遣いを節約した。全部を買えたわけ

ではないが、孫悟空の生き方から、私は大きな影響を受けた。悟空が世界を救うためにセルと共倒れた時、私は責任の意味を知った。

高校生になると、アニメの面白さに気付くようになった。カラフルな画面に、びつたりなBGMが流れ、キャラクターが真に迫ったものになる。「ハンター×ハンター」、「幽遊白書」、「ワンピース」、「NARUTO」などのアニメが大好きである。とりわけ「ワンピース」は私に、諦めない心や友情のすばらしさを教えてくれた。モンキー・D・ルフィは、友人や仲間のために自分の命を犠牲にしてもいいと思っている。そんなふうに通じてくれる友人を見つけてるのは、現実には難しいかもしれないが、彼らに憧れ、うらやましく思うと同時に、自分も彼らのように強い、自立した人間になり、そこまで犠牲を払ってもいい、と思えるような友達を見つきたい、と思うのだ。

私と同年代の人たちにとつて、ファミコンは非常に懐かしいゲーム機だろう。友達と「スーパーマリオブラザーズ」で遊んでいた時は、いつも相手が下手だったので、リモコンを奪い取っていたものだ。「チップとデールの大作戦」をやっているときは、わざと相手を持ち上げて、よく友達に怒られた。そういうゲームを介して、私はチームワークを学んだ。今思えば、それは一生忘れられない、楽しい思い出だ。

こうやって思い返してみると、私はACGとともに成長してきたんだな、ということが実感できる。宿題をさぼって漫画に夢中になっていたあの頃、「クレヨンしんちゃん」を読みながら笑っていると、いろいろな悩み事を忘れることができた。今でも、自分の好きな漫画を見つけると、必ず買ってしまふ。ギャグ漫画のユーモアとか、ファンタジー漫画の奇想天外さとか、学園漫画の恋愛模様など、すべてが私を強く引きつけてやまない。本棚にいっぱい並んでいる漫画を眺めると、満足感に浸れるのである。

最近でも、暇さえあれば、アニメを見ている。周りの人に「そんなに子供っぽいものを見て……」と言われても、私は全く気にしない。他人がどう思うかにかかわらず、自分が楽しむことができればそれでいいと思う。アニメを見る時、私は主人公と一緒に泣いたり、笑ったりする。そうしているうちに、心の中の悲しみや不満は、いつのまにか消えてしまうのだ。

ACGは私に友情、勇気、責任感の大切さを教えてくれたすばらしい先生だ。これからも、それらが親友のような存在として、私のそばに居続けてくれることは間違いないだろう。

(指導教官・新村美有紀)